

第 25 期日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分科会
第7回議事録

開催日時：2022年3月29日（火） 13:00～15:02

場所：オンライン会議（zoom 下記参照）

出席者：小松、西村、新福、井上、南、山本、井上、太田、菱沼、田高、三重野、吉澤、綿貫、坂本、神原（記録）

欠席者：萱間、真田、宝金、多久和、吉沢（敬称略）

本会議から参加した坂本史衣委員（特任連携会員）より自己紹介があった。

【議題】

（1）科学的助言等対応委員会における審議の手順について

日本学術会議の意思の表出の手順が変更になったため、小松委員長より資料に基づいた説明があった。（参考資料 1-1, 1-2, 1-3, 1-4）

社会にインパクトのあるものを出していくために、これまで提言であった発出の科目が提言と見解に分かれたこと、そのプロセスの違いについて説明された。

続いて、各班活動などでどのように科学的助言に繋がるかも含めて情報共有した。

（2）-1 地元創成看護班の活動

地元創成看護班の進捗について、西村副委員長より議事録に基づいた説明があった。JANS42で「地元創成看護学」の実装についてセッションをおこなうことを鑑み、11月をマイルストーンとして多媒体での広報をおこなっている。（資料議題2資料1参照）

以下のような議論があった。

- 地元創成看護の英訳として、**home community-oriented nursing** という表記の提案があった。（西村副委員長）
- 地元創成は地元と協力していくということが大事なので「collaboration」が重要である。（南委員）
- With community, co-などを使用して、英語頭で考えていけると良いのではないか。（神原委員）
- JANPU の企画で発表をされていた、高知県立大学の森下先生たちの早期退院に向けた活動は、大学とともに地域が変わっていく非常にインパクトのある活動であると

考えている。新しいタイプの地元創成看護を教育できており、これまでの総合医療などの地域活動が研究教育に活かされている。これらの先進事例も含めて提言から実装の事例をアピールしている状況である。これを分科会から確実に報告すべきである。ここからどのように研究して、次の提案を作っていくかが課題である。住民も含む多職種連携も課題になる。手応えはあるが、多職種、学際的な課題であるため、課題別委員会の立ち上げを提案したらどうか。(南委員)

- 看護とともに医療もどのように変えていくかも重要になってくる。地元創成看護もそうだが、各地での共通の課題もある。例えばプライマリケアの課題がある。(森山委員)
- 現在、調査、広報も双方できているので、報告は早めにとできると良いと思う(西村委員)。
- パンデミックと社会についての議論の中でケアの議論が始まっている。そのケアの部門での議論を提案してはどうか(小松)
- ケアサイエンスとの関わりや違いをどう捉えていくか。中央から関わっていくと平均で捉えられがちで、それを全国で行うのは難しい時代になっている。都道府県の裁量を考えた方法が重要であることを地元も含めて理解していないことが多い。制度とのバランスも必要である。(南委員)

(2) -2 DX班の活動

小松委員長よりシンポジウムの結果を中心に報告があった。

デジタル技術の進歩に看護がついて行っていない、実装に遅れをとっている。ヘルスケアのなかでどのように活動を行えるかという問いに対し、以下のような議論があった。

- 報告の表出を目指し、看護教育、研究、などの共通の課題をまとめていく。先駆的な事例のヒアリングなどを月1-2回行なう。それぞれの研究者が研究していることに加え、学会として全体の課題を見ていく必要がある。(小松委員長)
- 制度、データヘルス改革も見なければならぬ。技術との共存を考えていくか、ハウツーものの整理、個人情報の問題、データの整理なども。(森山委員)
- 市民サービスの倫理審査を受け、研究倫理が必要であり苦勞もしている。教育、実践も含めて考えて頂ければ。オープンサイエンスとデータ駆動型(南委員)
- 文部科学省アフターコロナのDX人材の強化事業では看護で138校ある。これもウォッチングしてはどうか(田高委員)

(3) 公開シンポジウム「ポストコロナ時代に求められる看護系人材(仮題)」について

人材育成のシンポジウムの準備状況について小松委員長より説明があった。

JANS若手研究者活動推進委員会の委員長として仲上先生に指定発言をお願いする。西村先生は医師の立場や協働の立ち場から、本間先生は、メディアや社会からの期待として指定発言して頂く。視聴者のわかりやすさの点から、指定発言の案内に、若手研究者、医師、マスメディアの立場からを入れる。

ポストコロナ時代に求められる人材について、どのように報告するかが課題であり、シンポジウムの後次の分科会で開催し進めていく。（小松委員長）

（４） その他

- 西村副委員長より「持続可能な発展のための国際基礎科学年（IYBSSD）」の案内があり、日本看護系学会協議会の取組も紹介された。
- APN などの議論はどこにはいるのか、これまでのヒアリングや調査の結果を踏まえ、学協会だけでなく学術会議から示すことも大事であると意見があった（南委員）。